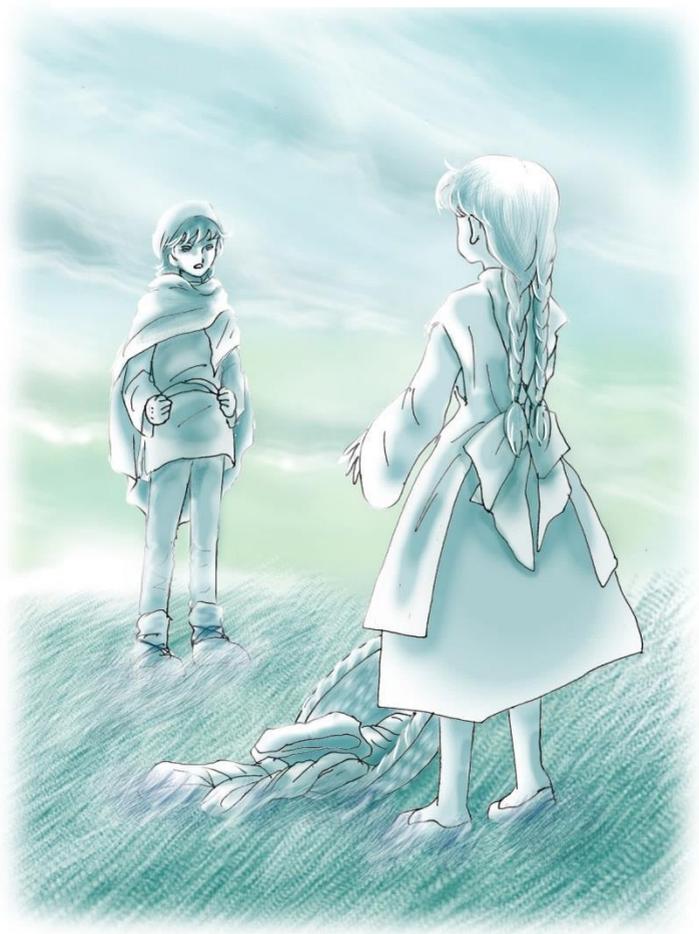


風の末裔シリーズ・5th シーズンの7
～スノウドロップ～



「エノシラ母さん、これ、どうしたの？」

執務室からの届け物を持って来たユウジーンが、エノシラ宅の御簾を開けてびっくり声を上げた。

「何って、毛糸を枷(かせ)にしているのよ。丁度よかったわ、手伝って頂戴、シーン」

部屋には生なりの毛糸が長く伸びて散乱し、足の踏み場もない。数分前までセーターだった物を、今しがた、ほどききった感じだ。しかも随分乱暴に。

「ごめん、手伝いたいけれど、すぐ執務室に戻らなきゃならないんだ」

「そう…」

エノシラは床を見下ろして嘆息した。

「いいわ、のんびりやるから」

「ハウスのチビ共に手伝わせりゃいい。通りがけに声を掛けて行くよ」

ハウスというのは、修練所のサオ教官の自宅バオの通称だ。

血縁のない子供達が十何人も寄り集まってギョムツと生活しているの、皆、何となくそう呼んでゐる。

親のいない子、親が忙しくて寂しい子らを、自分も天涯孤独のサオセンセがまとめて引き取って、わちゃわちゃ暮らしてい

る。両親を黒死病で亡くしたユウジーンも、そこ出身だ。

大勢いるので物や場所が満ち足りていたとは言えないが、親戚の家をタライ回しにされていたユウジーンには、唯一家庭と呼べた場所だ。何より、自分を大切にしてくれる大人がいる、安心出来る場所が、子供には必要なのだ。

エノシラはそんな教官センセに賛同して、忙しい助産師の仕事の後に、子供達の世話に通ってくれている。だからハウスの子供達は皆、尊敬込めて『エノシラ母さん』と呼ぶ。もっともユウジーンとは五つ六つしか離れていないから変な感じだ。

「そうね、頼むわ」

「でも、母さん、その毛糸…」

「チビッコ達の帽子でも編もつかしら。帽子なら今からでも冬に間に合うわ」

(セーター…編み上げた所じゃなかった?)

その言葉をユウジーンは呑み込んだ。誰のかわらないけれど、おっきい目のセーターを、母さんは暇を見つけては編んでいた。けど、もう、ほどこいちゃったんだ…。

「じゃあね」

御簾の向こうに消えるコバルトブルーの髪を見送って、エノシラはもう一度嘆息して毛糸の端を拾い上げた。

あたしがいけなかったんだわ…。

砂漠から遙々(はるばる)やって来た西風の殿方達。慣れない土地で大変だろうと、繕い物や差し入れや、ちよっとした事でもたいそう喜んでくれたので、ついつい余計に世話を焼いてしまった。こちらは子供達の世話の延長気分だったのだ。

「あたしがもっと『気にしなければ』いけなかったのよ」

相手は立派な大人の男性だというのに…。寒いのが苦手だっというから、軽い気持ちで編んだセーター。こんな物渡したら、相手は深く考えて受け取ってしまう所だった。あたしって何で考え足らずだったんだろう。本当に。渡す前でよかった…。

牧草地の土手、呼び止められた夕暮れ。

「この世の終わりみたいな目をしたあのヒト。」

「じゅんなさう……」

ハウスのチビッコにエノシラ母さんを手伝いに行くよう声を掛けてから、ユウジーンは執務室への坂を上がった。玄関の方へ回ろうとした時、不意に、横から服を引っ張られた。

「シッ……」

「ナーガ様？」

長い髪の長様が、事もあろうに窓の下で盗み聞きしている。そこって、自分達カキンチョの定位置なんですけど…。

「一体……？」

ナーガは何も言わず神妙顔だ。ユウジーンも黙って隣に座った。

「ナーガには言っておいた方がいいんじゃないか？」

ノスリの声。

「いえ、いつもみたいに気軽に見送って貰いたいから。あっちへ戻ってから手紙を書きます」

シドの声。室内はどうやら二人きりみたいだ。

「まあ、確かに、若いのも使えるようになって来たし、来年からシドが来なくなっても、回るっちゃあ回るが…。しかし、お前さんの存在価値は、執務室の仕事の穴埋めだけとは、俺は思っちゃいないぞ」

「はい……有難うございます」

「やっぱりあれが、エノシラと顔を合わせるのが辛いのか？」

「いえ…。そんな事で蒼の里から遠ざかる位なら、最初から告白なんかしません。逆です。蒼の里に来るのをおしまいにする事にしたから、最後に思いを打ち明けたんです」

「……………」

「……………」

窓の下のナーガとユウジーンは、顔を見合わせて唾を呑み込んだ。

「ただ、エノシラが思いの外気を使ってしまつて。執務室にまで入らなくなつてしまつたのには、申し訳なかつた」と。

「それはお前が気に病まなくていい。あの娘(二)は悪い風を考へ過ぎるんだ。まあ、お前が来なくなるのが自分のせいだと思ひ悩む恐れがあるから……。ふむ…、俺が決定した事にしようか。」

「助かります」

玄関にホルズの鼻唄が聞こえ、二人は話を切つた。

「エノシラが執務室に来なくなつてしまつた理由について内緒話を始めたんで、入り損ねちゃつたんだ」

執務室の窓の下からそつと離れて、ナーガはユウジーンに言った。

「そりゃ、いつまでも西風の優秀な若者を蒼の里で独占している訳に行かないからなあ。でも、寂しくなるよな」

ナーガの関心はそつちで、しんみり顔だが、ユウジーンの頭の中は別の事で一杯だつた。

「エノシラ母さんには婚約者がいるのに!!」

そつ、エノシラが助産師の修行を終えて一人前になったら、教官センチと祝言をあげる…と、里の誰もが当たり前と思つて

「振られちゃつたのか。僕が女性なら、絶対シドなんだけとな。男性と女性じゃ、男を見る目が違つのかしらん?」

ナーガはケロリとした顔で、頭の後ろで手を組んだ。

「ナーガ様? シドの気持ち、知つていたんですか?」

「僕に言わせりゃ、一目瞭然だつたよ」

「ええっ?!」

「シドの全身の血が、エノシラの方を向いて流れていた。うん、男性つて実に判りやすいよ。女性は複雑怪奇だけれど」

「……マジですか」

「エノシラもなあ……まあ…、彼女は……律儀だ」

「……」

「ねえ、ユウジーン。僕は今の話聞かなかつた事にして、普通にシドを見送るよ」

「はい、俺もそうです」

「じゃ、執務室に戻ろう」

「あ、あの…」

「ん?」

「俺の血は、どつち向いて流れていますか?」

「………知りたい…?」

「……いえ、やっぱ、いいです」

男女の事は外野にはどうしようもない。ユウジーンもナーガに習って、平常に明るく見送るつもりだった。

……つもりだったんだけれど……。

翌日は、降ったりやんだりの雨模様だった。

シドの出立は雨が完全にあがってから、と決まった。あまり遅れると気温が下がって、砂漠の妖精のシドには厳しくなる。

ユウジーンは雨のあがった隙を突いて、ひと仕事をこなして里へ帰る所だった。またしよぼしよぼ雨が落ちて来た。

「もうちよっと降っていて欲しいなあ……」

慣れているとはいえ、一人暮らしに戻る瞬間ってやっぱり寂しい。

「あっ……」

小雨に濡れた地上に、何か見える。草原の真ん中の岩の上に誰か横たわっている。……こんな雨の中……

近付いてみて、ユウジーンはしゃっくりのしたみたいに息が止まった。素っ裸の女の子がシナを作って、仰向けでユウジーンを招いているのだ。

「な、ななな……なんで……?!」

離れた所に馬を降ろして、遠くからそおっと声を掛けた。

「あ、あの……か、風邪ひきますよ……」

その娘の艶なまめかしい首がバサリと崩れ落ちて、ユウジーンは飛び上がった。

「わあ——っ!!」

後ろから露の葉っぱを被った二人組に抱き付かれた。

「やあい、引っ掛かった!」

「風邪ひきますよだ……? きゃはは!!」

「ヤン!! フウヤ!!」

岩の上の女の子は粘土を盛った作り物だった。

「し、心臓が口から飛び出るかと思ったぞ……!」

「あはは、ごめんごめん。午前中、ユウジーンがあっちへ飛びのが見えたんだ。んで、帰りもここ通るだろうって、大急ぎで粘土を集めたんだ」

「どう? 僕の作った芸術品」

……何て暇な連中だ……。

「下品過ぎるぞ。それに俺の好みはもうちよっとポッチャリだ」
ユウジーンは苦笑いして、灌木の中に二人が張った天幕に移動した。

「そうか、二人は今、旅しているのか。じゃあ、シドは帰りに三峰に寄っても会えないね。寂しがらるだな」

「うん、でも来春には会えるよ」

「いや……」

「コウジーンは、シドが蒼の里へ来るのは今年限りだと話した。」

「へええ？ 女の子にでも振られちゃった？」

「えっ?! いや、そんな事は……」

些細な冗談に馬鹿正直に反応したコウジーンを、見逃してくれるほど甘いフウヤではなかった。例の調子でなだめたりすがしたりされ、結局みんな喋らされた。

「ふう……ん……ん……」

「どうにかしようなんて思うなよ。シドは自分の中で一段落させているんだ」

「どうにかって、そのエノシラって女のヒトがシドの事を何とも思っていないんなら、どうしようもないでしょ」

フウヤにサクリ言われて、コウジーンは取りあえずホッとした。また作戦とか言い出すんじゃないかとヒヤヒヤしていたのだ。

「でもそのヒトが、ただ先約を優先させただけで、何とも思っていないんじゃないんだとしたりっつ」

「フウヤ……、回で、想像だけでそこまで言えるかな？ サオセンセとエノシラ母さんは、ずっと一緒にハウスを切り盛りして来たんだぞ」

「一緒に仕事しているだけで恋仲になれるんなら、僕もヤンも養蚕小屋でハレムだぞ。なあ、ヤン」

ヤンは噴き出しそうなお許を堪えながら首をブルブル振った。「女のヒトの仕事の労力を無限に思っちゃダメだよ。助産師の仕事をやって、ガキンチョどもの世話して、へとへとのお苦なのに、シドやソラの世話も焼いていたんでしょ」

「……………」

コウジーンは考えた事もなかった。そういえば、エノシラ母さんがくつろいだり何もしていない瞬間って、見た事がない。

「コウジーンこそ、そのヒトの事あまり分かっているんじゃないの？ まあ、三歩離れた外野の方がよく見えたりするんだけれどね」

「素敵なヒトだよ」

寡黙なヤンが口を挟んだ。

「執務室でのシドとの掛け合いがホントに楽しそうだった。僕にはいい感じの間柄に見えたんだけれどな。ねえ、コウジーン、シドは自分の中で一段落させて満足なんだろうけれど、エノシラさんは、どうなんだろうっつ」

「そりゃ、このまま教官センセと一緒に……」

コウジーンは言葉が詰まった。癪癪起こしたみたいに乱暴にほどかれたセーター……。エノシラ母さんの心は乱されるだけ

乱されて、宙ぶらりんで放り出されたまんまなんじゃないか？

「僕、エノシラさんに恩がある。ね、ユウジーン、僕ら、あの
ヒトの為に何か出来るかなあ？」

「あくまでエノシラ母さんが、自分で自分の気持ちを確かめて、
すっきりさせてあげるだけだ。現実をどうこうするのは俺等の
役割じゃない」

「ホイ来た」

「穏やかに、だね…」

結局、額を突き合わせて画策する三人の図があった。

「フウヤ、バタな事言うなよ」

「どんな？」

「エノシラ母さんが悪者に襲われている所をシドが助ける、と
かい奴だよ」

「凄、ユウジーン！ そんなの全然思い浮かばなかった！」

「……………」

「現実問題無理だよ。その悪者をどうやって調達するんだよ。
僕やフウヤが化けたぐらいじゃ、十中八九返り打ちに遭うぞ」
「ヤンは自分の首根っこを捕まえた逞しい腕を思い出して肩を
竦めた。」

「いつも横にいて空気みたいなヒトにちゃんと向き合える瞬間

ってどんな時？」

「そのヒトが死んじやうと思った時」

「ヤンが即答して、フウヤは罰悪そうにはにがんだ。」

「むむ……………」

ユウジーンは雨の上がった草原の方を見やった。

「エノシラ母さん！」

修練所の厩の前の道。

帰り道のエノシラが、仕事道具のカゴを抱えて振り向いた。

「あら、ジーン、戻ったの？ 雨に濡れなかった？」

「うん、それは大丈夫。あ、さ、魔性を見たんだ。里のすぐ側

で」

「えっ…」

「頭に蛇が一杯生えた、目の赤い奴。さっき馬繋ぎ場でシドに
は知らせた。これからナーガ様に報告に行くんだ」

「何でこんな回りの道をつ？」

「あ…、校庭の子供達に、境界を越えないよう注意して来た」

「そう、ジーンも気を付けてね」

「うん」

本当に心配そうなエノシラの顔に、ちょっぴり胸が痛んで、

ユウジーンは執務室へ行く振りをして、馬繋ぎ場への角を曲が

った。

エノシラは自宅ではなく、里外れのハウスの方へ向かった。子ビッコ達にも注意してあげなくては。

「あらっ。」

分かれ道で見慣れぬ子供を見た。誰かがススキの穂を被って遊んでいるのかと思っただが…違う？ 真っ白な髪の子供だ。

「貴方、どこの子？ 待ちなさい!!」

得体のしれない子供が逃げ出したので、エノシラは反射で追いついた。

「あっ!」

子供は牧草小屋の脇の境界をあつという間に越えて、消えてしまった。エノシラは立ち止まって躊躇した。里の外には……。

しかし次の瞬間、絹を裂くボーイソプラノの悲鳴。

「きゃああ——っ助けて!!」

さっきの子だ！ それを放って置けるエノシラではない。仕事道具を放り出し、干し草の山にあった三本ホックを手に、エイヤッと境界の出口に飛び込んだ。

外ではヤンとユウジーンが大忙がしだった。

「フウヤ、こっちこっち!」

『大道具』をスタンバイし、駆けて来たフウヤを素早く繁みの中へ招き入れた。

次の瞬間、三本ホックを構えたエノシラが、境界を抜けて走り込んで来た。

「ねえ、さっきの子！ 何処にいるの？ ここへおいで!」

あたりを見回したエノシラは、踏み倒された草原の先に、転がった何かを発見する。子供が倒れている？ 駆け寄って息が止まった。さっきの子が、土くれの人形と化して横たわっているのだ。

「ひい……」

喉が干上がって声が出ない。

そこから十歩先にも草が倒れ、一回り大きな土の塊が転がっている。見たくない……けれど、確かめなきゃ……。

「あああ!!」

エノシラは口を一杯に開いて悲鳴を上げた。

「シドさん——!!」

「一目で分かって貰えた。僕、彫刻家になろうかな?」

繁みの中でフウヤが満悦そうに鼻の下をこすった。短時間で超リアル粘土人形二体を作り上げてしまったフウヤは、意外とそっち方面の才能があるのかもしれない。

シドが得体のしれない魔物に土人形にされてしまったというストーリーだ。エノシラが一瞬シドの事、真剣に考えてくれればいい。それで自分の気持ちに気付いて向き合って、その上でどうするか決めれば、きっとモヤモヤも晴れるだろう。

「よし、そろそろ種明かしに行こう」

あんまり引っ張ると冗談で済まなくなる。ユウジーンが立ち上がろうとした時、物凄く予定外な事態が起こった。

バラ、バラ、バラ……

大人しかった空が急に息を吹き返して、大粒の雨を落とし始めたのだ。

エノシラの顔の血が引いた。雨が粘土人形を溶かしてしまっ!! 次の瞬間、繁みの少年三人の血の気も引いた。

ヒリヒリ、ヒリ——!!

おさげ娘が自分のスカートを思いっきり引き裂いて、腰から剥ぎ取ったのだ。それを広げてシドの土人形に被せる。

「エ…エノシラ母さん…!!」

繁みの三人はあまりの事に、両手で目を覆って声も出せない。

エノシラは更に上衣も脱いでそれをフウヤの人形に被せた。

今や、おさげ娘は、下帯だけのあられもない姿だ。

ど・ど・どおしよあ〜…

出るに出不れない繁みの少年三人を、更に縮み上げらせる事態が起きた。

「ナーガ様!! ナーガさまあ——!!」

上空をナーガの深緑の馬が通過したのだ。

なんちゅういらんタイミングだ?!

「ナーガ様——!! シドさんが!! シドさんを助けてえ——!!」

おさげ娘は恥も外聞もなく、両手を広げてブンブン振り回している。目のやり場に困る、何て言っている場合じゃない。このまんまじゃエノシラに、ナーガ長の前でトンでもない恥をかかせてしまっ!!

ナーガの馬影は地上に気付いて、真っ直ぐ降りて来る。

「ダメだあ——!!」

ビックリ仰天のエノシラの身体を、目をそらして自分の脱いだ上衣で覆う三人の少年がいた。

雨の中、少年三人が正座してシュンとしている。

エノシラがナーガの上衣をはおり、自分の破ったスカートをめくって、シド人形を凝視していた。

「本当にそっくり…。よく出来た芸術作品です」ト…」

声が氷みたいに冷やかだ。

「コメンナサイ……」

少年三人は蚊の鳴くような声で呟いた。

「ね、エノシラ、この三人にはちゃんと罰則を与えるから、許してやってよ。君だって、この子達がただのイタズラでこんなコトしたなんて、思っていないだろう」

「あたしの気持ちを試すように、シドさんに頼まれたんですか?!」

「ち、違う…」

ユウジーンはそこだけは慌てて否定した。

「シドは関係ないよ!」

「シドはノスリにしか打ち明けていないよ。僕とユウジーンはたまたま立ち聞きしちゃったんだ」

なだめるナーガをも、おさげ娘はキッと睨んだ。

「それでナーガ様も急にこんな物をくれたんですね。『運命のヒトに巡り逢わせてくれる護り石』ですって? 何で今更って思ったけれど…。それにも何か仕掛けがあるんじゃないっ?」

エノシラは、胸に下げていた白い石のペンダントを、汚らわしい物のように二本指で摘まんで、ナーガに突き出した。おさげの先まで電気がビリビリ通っているみたいだ。

「いや…そんな事は…」

いつも控え目で大人しいヒトが怒ると、どんな荒くれ者よりも凄味がある。ナーガもタジタジと何も言えず、ペンダントを

受け取るしかなかった。

「ってゆーか、このヒトもこちゃこちゃと画策してたんかい?! 何って間が悪いんだあ…!!」

エノシラはナーガの馬で送って貰う間ずっと無言だった。そうして里へ戻ると誰とも顔を合わさず、自分のパオに隠こもってしまった。

少年三人は、ノスリにコンコンと説教され、厩全部の掃除をやる、という罰が下された。やり終えるまで口をきいてはイケナイ、というオマケも付いた。口から先に生まれたフウヤには大変な苦行だ。ユウジーンとヤンも、掛け声すら出せず、口をギユッと結んで黙々と寝糞を集めた。

「ヤッホ、ヤンにフウヤ! 君らホントに神出鬼没だな。喋っちゃいけないんだって? 何やらかしたんだ?」

シドが呑気に軽口を叩いて通り過ぎた。誰の時のいた種でこんな羽目になったと思ってるんだ?! 三人は溺れたカエルみたいな顔で、心の中でジタバタした。

最期の厩に寝糞を敷き終えた時、里はすっかり寝静まっていた。三人、空腹で気絶しそうになりながら、フラフラと執務室への坂を登った。

カンテラを灯してナーガが一人で待っていてくれた。小机に饅頭が湯気を上げていた。

「もう喋ってもいいよ。お食へ」

「い、ただきまあふ…」

言葉の最後には、フウヤの口の中は饅頭で一杯だった。

ガツガツと食べ物をかっ込む三人を、ナーガは大机に頬杖付いて何とも言えない目で眺めていた。

「エノシラから、あと一つのお達し。さっきの事、シドにも誰にも絶対言わないようにと。言ったら親子の縁を切るぞうだ」

「ええ〜!!」

ユウジーンが饅頭の具を口からはみ出させながら、情けない声を出した。

「口がきけるようになったら、一番にシドに話そうと思ったのに〜」

「そんなに言っちゃ駄目な事っ」

フウヤがナーガを見つめて素朴に聞いた。

「んん〜、まあ……端的に言っとエノシラは、自分の事などごとと忘れて、シドに新しい恋を見つけて欲しいんだ」

「……………」

三人は黙った。元々、エノシラ次第の作戦だったんだ。彼女がそう言っんなら、それで終いにしなくては…。

何だかドッと疲れた三人がユウジーンのパオに入ると、シドも部屋を暖めて待っていてくれた。

「疲れだろう。生姜の入った飴湯があるよ。温まってぐっすり眠れる」

ユウジーンのパオにはベッドが三つあるのだが、シドは既に床に毛布を敷いて寝転んでいた。ベッドは少年三人に明け渡すつもりだ。

「僕、そっちで寝るよ。シド、明日から一杯飛ばなきゃならぬいんでしょ」

「床が好きなんだ、落ち着くし。それよか、ここでヤンとフウヤに会えてよかった」

西風の青年はヤンに遠慮する隙を与えず、毛布を被って横になっってしまった。

雨の音は途切れている。朝にはあがってしまっただろう。明日からの着の里には、シドの姿は無い。何だか実感が湧かない。

明け方、少し霽もやが立った。気温が下がっているんだ。

赤い目をしたエノシラは、パオから出て背筋を伸ばした。夜明け前の藍色の空に黒い雨雲が流れ、その隙間に久し振りの煌星(きらぼし)が見える。

「…?!」

足音に振り返ると、赤っぽい黒髪の少年が立っていた。

「エノシラさん」

「ヤン……何か、ご用?」

エノシラの声はまだ堅さを帯びていた。

「あの…僕…」

ヤンは頑張って、眠れないベッドで一生涯考えた事を喋った。

「あの…秋にフウヤが怪我したの。いっぺんは死んじゃったと思った。だって川が血で真っ赤だったの」

「……………」

「心臓が喉まで上がって、一杯一杯、後悔した。何で、もっと気を付けてあげなかったの? って」

「……………」

「それから、もっと優しくしてあげたかった、喜ばせてあげたかった、一緒にいてあげたかった…って、頭の中でぐるぐるして、明日もあさっても来ない気がした」

「……………」

「エノシラさんにもあんな思いをさせちゃった。ごめんなさい」

「……………」

エノシラはちょっと柔いだ口許を開いた。

「今もそんな抱えを、フウヤと一緒にいるの?」

「うん…、四六時中じゃないけれど。生きていけばいつかは何らかの形で別れは来るでしょ?。その時後悔しないよう、今、一杯一緒に過ごそうって思う」

「そう…」

エノシラは今度は目許を柔げた。

「それで、あたしにもそれを教えてくれようとしたの?」

「そう、でも…何ていうか…。やっぱりいけない事だって思った。ヒトの心に土足で踏み込んだ気がした」

「そうね…」

エノシラは踵を返してパオに入ってしまった。後に残ったヤンがドギマギしていると、白い塊を抱えて出て来た。

「これを持って行って頂戴。シドさんの荷物にこっそり紛れ込ませて」

白い塊は毛糸のストールだった。さすがにセーターは無理なので、徹夜で突貫で編んだストール…。

「心に土足で踏み込まれて…あげたくなかったの。でもそれだけ。あたしの編んだ物だとは思わないで、身に付けて欲しい。

あげたいって、あたしの欲望だけを果たしたくなったの」



「僕達が蒼の里でシドを見送るなんて、変な感じだね」

早朝の馬繋ぎ場で、シドは執務室の面々、そしてヤンとフウヤと握手をした。エノシラの姿は無い。いつものように普通に職場へ向かったという。

「ちょっと抜けさせて貰って来ればいいのにな」

唯一何も知らないホルズが、気楽に言った。

「仕事に真剣なんですよ、あのヒトは」

シドはちょっと寂しそうに里の奥を見やった。隣の青毛の鞍袋の底には、ヤンがこっそり押し込んだストールが入っている。「ここはシドのもう一つの故郷だよ。いつでも自由に帰って来ておくれ」

「ナーガ様も、たまにはモエギ様に顔を見せに来て下さいね」

これが最期と知っているのは表面上はノスリだけが、皆、密かに分かっている。馬上で手を振り、空の一点となる砂漠の妖精を、皆静かに心を込めて見送った。

「あっけなかったな……」

ノスリはホルズと連れ立って執務室へ向かい、一日一緒に仕事する事になっているユウジーンとヤンも、後に続いた。

「じゃ、行こうか、フウヤ」

ナーガは義弟を振り向いて、手を差し出した。

「てへ…」

「フウヤはちょっと照れ臭そうに、でも素直に手を出した。蒼の里の修練所で、一日だけ授業を受けさせて貰う事になったのだ。あんなにナーガの世話になるのに抵抗めったのに、今は素直になれる。自分に自信が着いたからだろうか。」

「そうやって皆、前に向いて今日の一日を過ごそうとしていた。」

「夕方、牧草地の土手……。」

「一日の仕事を終えたエノシラが、ほおっと突っ立っている。」

「夕陽のオレンシも干し草の薫りもいつもと同じ、何も変わらない。なのに何で、何もかも初めて見るみたいに、ポツカリ現実感が無いんだろう？」

「エノシラ……」

「いつの間にか、隣にサオ教官が立っていて、おさげ娘は我に返って跳び上がった。」

「どうしたの？ 何か見ていたんですか？」

「い、いいえ」

「……………」

「教官センセはちょっと間を置いてから、気を取り直したように喋り始めた。」

「ね、エノシラ、面白いおまじない、教えてあげましょうか？ 高学年の女の子の間で流行っている」

「は？ おまじない？」

「こうやって、両手を組んで、目の前に持って来て」

「こ、こうですか？」

「エノシラは言われるまま、センセの真似をして両手を組んだ。『そうしたら、指を組んだまま手の平を離して、それから、親指の腹同士をくっ付けて……そうそう。そして、二本の人差し指を離して、真っ直ぐ平行に立てて』と」

「は、はこ」

「エノシラは寄り目で真剣に、センセの言う通りにした。」

「人差し指の右は自分、左は自分の気になるヒト。イメージして……」

「……………」

「エノシラは驚愕の顔になった。イメージした途端、どんなに離そうとしても、指が勝手に近寄って行くのだ。そして、ついには人差し指同士がピッタリくっ付いた。」

「これはねえ、心の奥底を確かめるおまじないだそうです」
「サオセンセは静かに言って、エノシラの表情と指を交互に見つめた。」

「君の心の奥底は、そのヒトの所にあるのだから」

「何を言っんです?! センセまで!!」

エノシラは両手をほどいて手首をブンブン振った。

「こんなの、子供同士の引っ掛けの遊びだわ!」

「そう、まあ、指ってのは、そうやって組むと、力めば力む程くっつくようになってるんです。でも君は、『気になるけど』って言われて、真っ先に浮かべるのは、私ではないのですね」

「そ…そんな…!!」

エノシラは慌てて言い訳をした。

「センセは、当たり前側に居てくれるから、気になるとかいうのは別枠です」

「うん……」

サオセンセは瞬きしながらも、エノシラから目を離さずに続けた。

「私もね……当たり前側に居過ぎて、深く考えるのをやめてしまっていたんです」

「センセ……」

「ちゃんと確めに行きなさい。人差し指のそのヒトは、来春からはもう来ないんだそうです」

「えっ?」

「残りの人生で、今が唯一逢える距離にいるのかもしれないですよ」

「……!!」

それから少し後…、夕暮れた里の外れの道を、サオ教官はノスリと歩いていった。

「あれでよかったですかね」

「すまないな、理不尽な事、頼んじまって」

「私もね、あの子にプロポーズした時は、まだ若僧でした。受けてくれた彼女もね。理想に先走り、伴侶を選ぶ基準が何たるかが分かっていたいなかった。勿論、ハウスの世話を滞りなくやってくれるあの子と私が一緒になれば、便利だし、何もかもが上手く行きます。でも……」

「うん」

「私の夢の、貴方とフィフィさんの家庭…、それには近付けません。そんな考えじゃ……」

「……………」

ノスリは一番星の空を見上げた。

オウネ婆さんへの取り成しや、これからのハウスの子供達の世話。そういう雑多を引き受けてやるのは自分の役割だ。執務室は、蒼の里は…、あのおさげ娘に、その位は融通してやってもいいと思う。それでも尚有り余るモノを買っている。

三峰より大分手前の森の中。

オレンジの小さな灯りは、少し早めの夜営に降りたシドだ。いつもはソラが一緒だったし、今回も往路は「ウゥシーン」がいた。思えば独りでの長旅は初めてだ。ちょっと「元気が出ないのは、そのせいだ…。」

「夜って暗いもんだな……。」

「本当に真っ暗ですね。」

いつの間にか、目鼻の先におさげ娘が立っていて、シドは座ったままの形で飛び上がった。

「ま、まぶさかっ！」

「地雷とかじゃないですよ。いきなり斬り付けなさいとアオミさんね。」

「あ、ああ……。」

「これがあったから一直線に来られたんです。」

「……。」

エノシラの差し出した白い石のペンダントを、シドは怪訝なうに覗き込んだ。

「えと……、シドさんに会える魔法の石……とか……。」

「……。」

「ナーガ様がくれて……。」

「ホントに？ ナーガ様が、それを魔法の石だって言ったの？。」

「……？ ええ、そうですね……。」

「だって、それ、子供のオモチャだよ。西風の子供がオハジキに使ってる……砂漠に幾らでも転がってる、ただの石ころ……。」

「……。」

冬枯れの暗い森に、ほんの少しの雪が降る。

オレンジの小さな灯りはチロチロと、そんな雪舞の中で暖かく揺らめく。まるで冬に咲く花みたいだ。

〜おしま〜